

若年者に発生した腎細胞癌の1例

京都府立医科大学泌尿器科学教室 (主任: 渡邊 決 教授)

内藤 泰行, 石田 裕彦, 西田 雅也, 邵 仁哲
中村 雅至, 米田 公彦, 内田 陸, 渡邊 決

A CASE OF RENAL CELL CARCINOMA IN A YOUNG ADULT

Yasuyuki Naitoh, Yasuhiko Ishida, Masaya Nishida,
Jintetsu Soh, Masashi Nakamura, Kimihiko Yoneda
Mutsumi Uchida and Hiroki Watanabe

From the Department of Urology, Kyoto Prefectural University of Medicine

Renal cell carcinoma in young adults under the age of forty is rare. A case of renal cell carcinoma in a 22-year-old female is presented. Microhematuria was pointed out in the patient by a health check up system and an ultrasonogram revealed a solid mass 5 cm in diameter in the lower pole of the right kidney. The patient was referred to our clinic in January, 1994. An abdominal CT showed a solid and well bordered mass in the right kidney. Renal tumor biopsy was revealed renal cell carcinoma. Right radical nephrectomy was performed on February 9, 1994.

From 1986 to 1994, 4 cases of renal cell carcinoma in young adults, other than this case, have been treated in our clinic. All of them have been healthy for more than 6 years, suggesting a good prognosis.

(Acta Urol. Jpn. 41: 537-539, 1995)

Key words: Renal cell carcinoma, Young adult

緒 言

腎細胞癌は50歳代から60歳代を好発年齢とし、40歳未満のいわゆる若年者腎細胞癌は比較的稀とされている。最近われわれは、超音波検査で発見された22歳の女性に発生した腎細胞癌の1例を経験したので、若年者腎細胞癌について考察を加えて報告する。

症 例

患者: 22歳, 女性

主訴: 顕微鏡的血尿

既往歴・家族歴: 特記すべきことなし

現病歴: 1993年12月, 成人検診にて顕微鏡的血尿を指摘され近医を受診したところ, 超音波検査にて右腎下極に腫瘤を指摘された。1994年1月21日精査加療目的にて, 当科入院となった。

入院時現症: 身長 164 cm, 体重 44.5 kg で栄養状態は良好であった。右側腹部に可動性のある右腎下極を触知した。

血液一般および血液生化学的検査: 特に異常は認められず, 血沈および CRP も正常範囲内であった。

検尿所見: 入院後の検尿では赤血球 (-) であった。

泌尿器科的検査所見: DIP では, 明らかな腎陰影の変形や腎盂腎杯の圧排などの異常所見は認められなかった。超音波検査では, 右腎下極に直径約 5 cm の mixed pattern を呈する腫瘤が認められた (Fig. 1)。腹部造影 CT では, 右腎下極に境界明瞭で, 腎実質よりも low density で隔壁を伴った充実性腫瘤が認められた (Fig. 2)。MRI-T₁ 強調画像では, 病巣部は high-intensity を示し, T₂ 強調画像では, 不均一な high-intensity を示した。

画像診断より, 右腎の悪性腫瘍を疑い, 確定診断をえるために経皮的右腎腫瘍生検を施行したところ, 腎細胞癌との診断をえた。この際, 肺・骨・肝およびリンパ節には転移は認められなかった。

以上より, 右腎細胞癌 stage I, T2N0M0 と診断し, 1994年2月9日, 右腎部分切除術を予定し手術に臨んだ。術中超音波検査では, 腫瘍は被膜に被われて

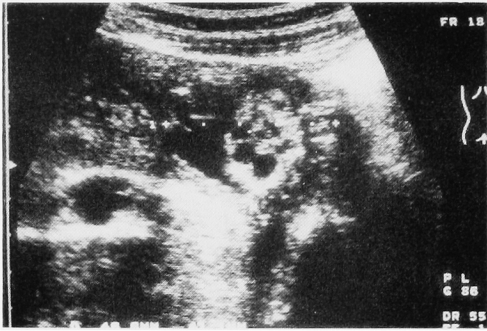


Fig. 1. An ultrasonogram showed a tumor 5 cm in diameter with a mixed echo pattern in the lower pole of the right kidney.

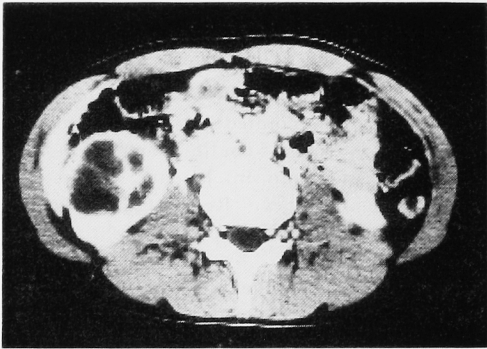


Fig. 2. A contrast-enhanced CT showed a solid and well bordered mass in the right kidney.

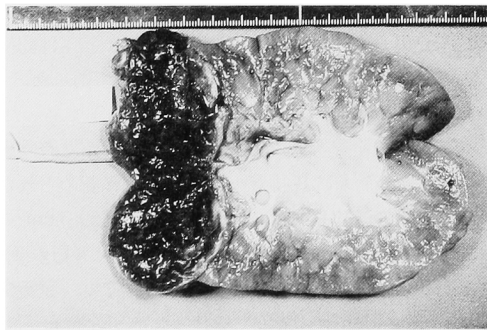


Fig. 3. A cross section of the specimen showed a capsulated tumor 5.0×4.0×2.5 cm in size with central necrosis.

おり腎実質との境界は明瞭であった。しかし、腫瘍が腎門部近傍まで存在したので部分切除は不可能と判断し、根治的右腎摘除術を施行した。

摘出標本：摘出した腎は、大きさ11×5.5×2.5 cm、重量140 gで、腫瘍の大きさは5×4×2.5 cmであった。腫瘍は暗赤色充実性で、被膜に被われており、内部に壊死を伴っていた (Fig. 3)。

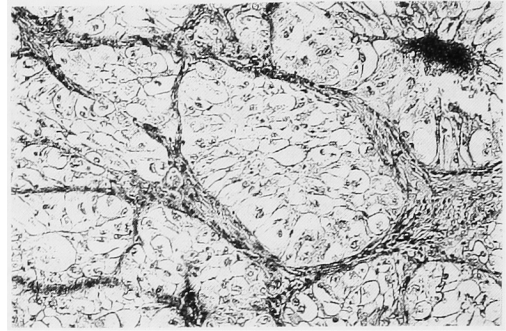


Fig. 4. Histology showed renal cell carcinoma in clear cell subtype.

病理組織学的所見：腫瘍は膨張性に発育し細胞型は淡明細胞型で、構築型は胞巣型、一部腺管型ないし乳頭型な構造を示していた。細胞異型度はG2、浸潤増殖様式はINF-βで、静脈への浸潤はなく、daughter tumorも認められなかった (Fig. 4)。以上より腎細胞癌、pT2N0M0V0と診断した。術後経過は良好で、手術後18日目に退院となった。

考 察

腎細胞癌は50歳代から60歳代を好発年齢とし、40歳未満のいわゆる若年者腎細胞癌は比較的稀とされている^{1,2)}。友政ら¹⁾、山下ら³⁾の報告をあわせた872例の腎細胞癌症例の年齢分布は、50歳代と60歳代とで全体の58.6%を占め10歳代が0.7%、20歳代が1.0%、30歳代が3.3%と、40歳未満の若年者は5.0%であった。当教室が1986年から1994年の19年間に経験した本症例を含む130症例の年齢分布においても、20歳代が2例1.5%、30歳代が3例2.3%で、40歳未満は5例3.8%と頻度の低いものであった (Table 1)。欧米においては、1,735例中50歳代と60歳代とで全体の61.4%を占め、10歳代が0.2%、20歳代が1.8%、30歳代が6.4%で、40歳未満の若年者は8.4%と、本邦より若年頻度が高い報告がなされている⁴⁾。

腎細胞癌の男女比は、全年齢層においては1.6:1から3.8:1と男性に多くみられるとされており⁵⁾、40歳未満の若年者においても60%が男性であったとの報告があるが⁶⁾、一方で77%が女性であったとの報告もある²⁾。当教室がこれまでに経験した40歳未満の5例においても、女性3例男性2例で、明らかな男女差は認められなかった。

若年者腎細胞癌の病理組織学的特徴として、松岸ら²⁾によると、構築型では乳頭状を呈するものが50%と多く、細胞型では顆粒細胞型が35.7%と多い傾向にあると報告している。本症例を含め当教室がこれまで

Table 1. Cases of renal cell carcinoma in young adults in our clinic (1986-1994)

Case	Age	Sex	Cell form	Cell type	Stage	Grade	Follow-up period
1	27	F	cystic	clear cell	I	2	14 years (alive)
2	38	M	alveolar	clear cell	II	3	7 years (alive)
3	38	M	alveolar	clear cell	II	2	6 years (alive)
4	38	F	alveolar	mixed	I	1	6 years (alive)
present case	22	F	alveolar	clear cell	I	2	5 months (alive)

に経験した40歳未満の5例においては、構築型では胞巣型が4例と多く、また細胞型では淡明細胞型が4例と多い傾向を示した。

若年者腎細胞癌患者の予後については、里見ら^{7,8)}が25例の検討を行っている。それによると、1年以内と早期に死亡した症例はすべて high stage, high grade であり、治療手術症例で low stage, low grade であれば、長期生存の可能性が期待できるとしている。また Castellanos ら⁹⁾は、小児腎細胞癌84例中 stage I は39例で、5年生存率は79%と予後は良いと報告している。Lieber ら⁶⁾は若年者腎細胞癌89例中 stage I は48例で、5年生存率は79%と low stage ほど予後が良く、grade に関しては、low grade ほど生存率が高く、予後は grade に依存していると述べている。さらに Lieber ら⁶⁾は、男性は女性と比較して予後が悪く、その理由として男性には high stage が多いからであると述べている。Schiff ら¹⁰⁾は腎細胞癌523例中40歳以下の若年者腎細胞癌37例の5年生存率を40歳を越える腎細胞癌と比較し、若年者腎細胞癌の stage I では92%で、40歳を越える腎細胞癌の stage I では45%と若年者腎細胞癌が有意に予後が良いと述べ、stage II・III・IV においても、有意差はないものの若年者腎細胞癌の予後が良いことを表示している。その理由として Schiff ら¹⁰⁾は、若年者においては腫瘍宿主間免疫がより効果的に関与するからであると述べている。

当教室がこれまでに経験した40歳未満の本症例を除く4症例では、1例が G3 であったものの、4症例すべて6年以上生存している。今回の検討では、腫瘍宿主間免疫についての検索は施行していないが、本症例は G2 であるものの stage I であり、長期生存の可能性が期待できるものと考えられる。

結 語

22歳の若年者に発生した腎細胞癌の1例を経験した

ので報告した。当教室における腎細胞癌症例130例において40歳未満の若年者は3.8%であった。本症例は stage I, G2 であり、今後長期生存が期待できるものと思われた。

なお、本論文の要旨は第147回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した。

文 献

- 1) 友政 宏, 秦 亮輔, 雨宮 裕, ほか: 若年女性に見られた腎癌の1例. 西日泌尿 51: 1331-1334, 1989
- 2) 松崎 理, 長尾孝一, 斎賀 一, ほか: 若年者腎癌の特徴. 日病理会誌 74: 412, 1985
- 3) 山下敦史, 日置琢一, 佐谷博之, ほか: 16歳女子にみられた腎細胞癌の1例. 西日泌尿 54: 1602-1605, 1992
- 4) Riches EW, Griffiths IH and Thackray AC: New growth of the kidney and ureter. Br J Urol 23: 297-356, 1951
- 5) 阿曾佳郎: 腎実質腫瘍. 新臨床泌尿器科全書. 市川篤二他監修. 第1版, 第7巻 A, p. 100, 金原出版, 1983
- 6) Lieber MM, Tomera FM, Taylor WF, et al.: Renal adenocarcinoma in young adults: Survival and variables affecting prognosis. J Urol 125: 164-168, 1981
- 7) 里見佳昭, 中橋 満, 仙賀 裕, ほか: 若年者腎癌患者の生存曲線. 日泌尿会誌 79: 2131, 1988
- 8) 里見佳昭: 腎癌の治療の現状と今後の課題. 日泌尿会誌 81: 1-13, 1990
- 9) Castellanos RD, Aron BS and Evans AT: Renal adenocarcinoma in children: Incidence, therapy and prognosis. J Urol 111: 534-537, 1974
- 10) Schiff M Jr, Herter G and Lytton B: Renal adenocarcinoma in young adults. Urology 25: 357-359, 1985

(Received on December 26, 1994)
(Accepted on April 17, 1995)